岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第147号（2011）125－133

# 保育目標のとらえ方と保育実践の両者を質的に向上させる保育実践開発に関する考察

横松　友義　・　渡邊　祐三*　・　森　　英子**　・　伊勢　　慎***
豊池　利江****　・　斎藤　健司*****

今日の保育園には，保育課程経営の実現が求められている。保育課程経営とは，保育課程開発の各段階とそれに対応する経営活動をPDCAサイクルにのせて推進し，より豊かな園の保育を実現しようとする営みであるといえる。その実現のためのアクション・リサーチが，私立御南保育園において実施されている。同リサーチでは，実効のある保育目標の明確化過程をとおして，保育目標の明確化手順を開発し、その上で，所属保育士有志が，実効のある保育目標を達成するためのより発展的な保育実践を開発しようとする取り組みを行っている。本研究では，その過程の分析をとおして，実効のある保育目標を前提にした保育実践開発が，保育目標のとらえ方と保育実践の両者を質的に向上させる可能性があることとその実現のための課題について考察している。

Keywords：保育目標のとらえ方，保育実践，質的向上，保育課程開発，保育課程経営

## 1．本研究の目的と方法

2009年度より，各保育園[1]には，保育目標を明確にして，それらを実現するための全体計画，すなわち，保育課程を編成した上で，その保育課程に基づいてより具体的な指導計画を作成して，保育を実践し，さらに，保育課程を踏まえて，自らの保育と園の保育等の評価・改善に努めることが，法規的に義務づけられた[2]。この「保育課程の編成→指導計画への具体化→保育の実践→評価→改善」という一連の営みを，筆者らの研究では，「保育課程開発」と呼んでいる。この「保育課程開発」という用語は，横松・渡邊[3]が提唱したものである。その説明は，次のとおりである。保育とは，生命の保持と情緒の安定を図る「養護」と調和的発達を促す「教育」との一体化した働きかけと言われ，一般的に，この保育の各保育園における全体計画を保育課程と言い，各幼稚園における全体計画をカリキュラムと言う。そこで，カリキュラム開発という用語と同様な意味で「開発」という用語を用い，保育課程を編成し，指導計画に具体化し，保育実践を実施し，事実に基づいて省察し評価し，保育の計画と実践を改善していく一連の営みを「保育課程開発」と呼ぶ。筆者ら

岡山大学大学院教育学研究科発達支援学系　700－8530　岡山市北区津島中3－1－1
*御南保育園　701－0145　岡山市北区今保247－1
**白ゆり保育園　701－1214　岡山市北区辛川市場321－1
***福岡女子短期大学　818－0193　太宰府市五条4－16－1
****聖華保育園　719－0252　浅口市鴨方町六条院中2347－1
*****新見公立短期大学　718－8585　新見市西方1263－2

A Study on the Development of the Practice in Early Childhood Care and Education to Improve Both the Way to Grasp Its Goals and the Practice Itself Qualitatively

Tomoyoshi YOKOMATSU, Yuzo WATANABE*, Hideko MORI**, Makoto ISE***, Rie TOYOIKE**** and Kenji SAITO*****
Division of Developmental Studies and Support, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama city 700-8530
*Minan Preschool, 247-1 Imaho, Kita-ku, Okayama city 701-0145
**Shirayuri Preschool, 321-1 Karakawaichiba, Kita-ku, Okayama city 701-1214
***Fukuoka Women's Junior College, 4-16-1 Gojo, Dazaifu city 818-0193
****Seika Preschool, 2347-1 Kamogata-cho Rokujoinnaka, Asakuchi city 719-0252
*****Niimi College, 1263-2 Nishikata, Niimi city 718-8585

は，この意味で保育課程開発という用語を用いる。つまり，2009年度より，各保育園には，保育課程開発を推進するように努めることが，法規的に義務づけられているということである。

この保育課程開発を推進するためには，組織としての条件整備，すなわち，経営が必要である。事実，2009年３月に，厚生労働省より，保育課程開発における自己評価についてのガイドライン[4]が出され，「ＰＤＣＡの循環の継続」という経営的視点が導入されている。そして，この保育課程開発を推進するための経営研究については，萌芽的なものが公表され始めている。

保育課程開発を推進する上で，最初に必要になるのは，保育目標の明確化であると考えられる。それは，次の理由からである。保育目標がどういう順序でどのような表現で示されているかは，その園の重視する保育内容や保育形態を方向づけるものである。そして，明確な保育目標を得ることは，園の保育に対する自己評価の根拠を得ることに等しい。つまり，明確な保育目標を得ることができて初めて，保育課程開発，すなわち，「保育課程の編成→指導計画への具体化→保育の実践→評価→改善」という一連の営みを進めていくことが可能になるわけである。

しかし，保育目標の明確化手順に関する先行研究は，後述する岡山市にある私立御南保育園でのアクション・リサーチ以外では，「取り組みの途中で」の紹介[5]１件しか見いだすことができなかった。参考までに，幼稚園関係でも先行研究を調査したが，公表されているものは見いだせなかった。

そうした中で，横松[6]は，「保育課程経営」という用語を次のように提唱し，「保育課程経営研究」を推進しようとしている。「保育課程開発を推進するための組織としての条件整備，すなわち，経営を示す専門用語は見いだすことができなかった。そこで，近接領域の研究成果を参考に，2009年度より保育園において公的に用いられるようになった『保育課程』という用語と『経営』という用語を組み合わせて，『保育課程経営』という専門用語を用いることを提唱したい。そして，保育課程経営とは，保育課程開発の各段階とそれに対応する経営活動をPDCAサイクルにのせて推進し，より豊かな園の保育を実現しようとする営みと定義することにする。保育課程経営は，保育課程の内容開発と無関係に進行することはなく，内容開発を包含するが，本研究では，組織としての条件整備面に特に注目している。そこで，内容開発面を共に含む場合を『広義の保育課程経営』とし，含まない場合を『狭義の保育課程経営』とする。」

前述の私立御南保育園において実施されている，実際に効力のある保育目標の明確化手順を開発するアクション・リサーチは，保育課程経営研究の嚆矢といってよい。このリサーチでは，保育士が保育現場で実際にその達成を目指しており，同時に，保育士が納得できている保育目標が，実際に効力をもつ保育目標になると考え，この条件を満たす保育目標を「実効のある保育目標」と呼んでいる。[7]そして，実効のある保育目標の明確化過程をとおして，その手順を開発している。その上で，一方では，それを園の全所属保育士が受容，共有し，適切に保育実践に具体化していくための取り組みが続けられている。つまり，保育課程経営を実現しようとする取り組みを継続しているわけである。他方では，それに並行して，所属保育士有志が，保育目標を達成するためのより発展的な保育実践を開発しようとする取り組みも行っている。なお，園名の公表については，園より了承されている。

本研究では，その御南保育園におけるより発展的な保育実践の開発に至る過程の分析をとおして，実効のある保育目標を前提にした保育実践開発が，保育目標のとらえ方と保育実践の両者の質的向上を実現できる可能性について考察する。そのために，まず，この保育実践開発の土台となる保育課程経営を実現しようとする取り組みの進捗状況を概説する。その上で，並行して進められている保育実践開発事例の分析をとおして，前述事項について考察することにする。

## ２．私立御南保育園における実効のある保育目標と目指す子ども像の明確化・共有及び保育実践への具体化過程

### １）アクション・リサーチ開始までの経緯[8]

2002年４月１日に，岡山市初の幼・保一体型施設として，岡山市御南幼児教育センターが開園し，その一方の御南保育園は，社会福祉法人橘会が経営することになった。御南保育園では，園長の所属園であった私立橘今保育園での保育を基盤にし，2001年６月，岡山市・岡山市教育委員会が作成発表した幼稚園と保育園が積極的に交流を図り，幼児の発達に即して教育・保育を行っていくための「岡山式カリキュラム」の考え方に沿って保育を展開することになった。そのために，同園では，園の保育全体の根幹になる「保育目標」，及び，その成果として目指される「子ども像」が，園の保育の考え方や実際に等しく対応していないという問題を抱えていた。それに対して，園長は，改めて保育の原点に立ち返り，園独自の保育論・保育計画（今日の保育

課程に対応）・保育実践を確立したいと考えていた。その実現のために，保育についての園長の考え方を整理し，明確化し，保育士集団がそれらを確認し，検討した上で，岡山式カリキュラムの内容についての独自のとらえ方を明らかにすることが，園の課題となっていた。

そこで，同園では，園の保育を全体として理論化できると考えられるカリキュラム研究者と協働することにし，アクション・リサーチが開始された。

### 2）実効のある保育目標及び目指す子ども像の明確化・共有過程[9)]

まず，実効のある保育目標の明確化手順については，最初に，園長及び副園長とカリキュラム研究者の協議により，保育園での保育士の時間的余裕を考慮し，カリキュラム研究者が，必要資料を集め，人格完成へ至る過程及び人格完成へ至るための基礎に関する考え方と，その考え方を背景に明確にされている保育目標（この段階では「御南保育園が目指すもの」と表現している）という形で共同検討資料を作成している。すなわち，保育現場で実際に達成が目指されている保育目標を得るために，園内で，園の要覧，指導計画，実践記録等を収集し，保育実践の観察記録，保育実践に関する聞き取りを行っている。また，所属保育士が保育目標について納得できるように，教育面の諸目標の前提となっている教育基本法での「幼児期の教育」の規定についての理解を深める資料を収集している。同法で，幼児期の教育とは「教育の目的」である「人格の完成」へ至るための「人格形成の基礎を培う」ことであることを踏まえ，人格完成へ至る過程と人格完成へ至るための基礎についての理解を深めるための資料を，現在購入でき，一般によく知られていると考えられるものに範囲を限定して収集している。資料収集期間は，2007年4月から2008年6月までである。

人格完成へ至る過程及び人格完成へ至るための基礎に関する考え方の部分については，保育目標の背景としてとらえてよいかどうかの検討を園に依頼する形をとっている。その部分については，カリキュラム研究者が，前述の収集した元資料中の内容の解説あるいは解釈を提示している。自ら生きてきた中でつかんできたとらえ方を示したほうが，人格完成へ至る過程や人格完成へ至るための基礎について，実感を持って，園と共に議論ができ，保育目標を明確にできると考えてのことである。保育目標については，保育現場からの収集資料の内で次の条件を一つ以上満たすものを該当するものとし，園に検討を依頼する形をとっている。育てることが必要であると何度も強調されている事がら。子どもに育っている力として強調されている力を育てる事がら。日常的に繰り返されている事がら。写真に記録されている事がら。

カリキュラム研究者は，共同検討資料の内容を妥当なものにするために，園長と副園長から助言を得ることを繰り返し，最終的に了承を得た物をその時点での保育目標に関する考え方としている。職員全体で検討発展させていく元になる，その時点での保育目標に関する考え方を最初に明確にしているわけである。

明確になった保育目標については，職員を対象にする前に，カリキュラム研究者が，保護者を対象にその考え方を説明する講演を行っている。講演内容はビデオカメラで撮られ，職員は，2008年6月26日の職員会議で，講演時の配付資料と共にその内容を見て，感想を出し合った。そして，自由記述の質問紙調査の結果，保育士集団に保育目標に関する考え方が確認・受容され，次の意識変化が生じていることが認められた。園の保育目標に沿った保育実践を推進したい。園の保育についての誇りや自信が強まった。自己向上への意欲が生じた。

続いて，保育の基本，保育内容の構成の仕方，保育形態についての考え方と保育目標とを関係づけて，保育全体の理論的枠組みを明確化する段階で，目指す子ども像が保育目標を統合する形で明確にされている。その明確化手順は，次のとおりである。保育目標の明確化手順と同様に，カリキュラム研究者が，共同検討資料を作成している。保育の実際を踏まえて明確にしていくために，園内で，園の要覧，指導計画，実践記録等を収集し，保育実践の観察記録，保育実践に関する聞き取りを行っている。資料収集期間は，2007年4月から2008年9月までである。カリキュラム研究者は，収集資料から目指す子ども像を含めた保育全体の理論的枠組みに関する共同検討資料を作成し，保育目標の場合と同様の考え方で，その内容を妥当なものにするために，園長と副園長から助言を得ることを繰り返し，最終的に了承を得た物をその時点での目指す子ども像を含めた保育全体の理論的枠組みとしている。なお，この段階で，保育目標記述の修正も行われている。

園の保育全体の理論的枠組みについては，2008年10月16日に，カリキュラム研究者が，前述の資料を配付した上で，保育士を対象に解説している。自由記述の質問紙調査の結果，保育士集団にこれらの内容が確認・受容されて，次の意識変化が生じていることが認められた。園の保育の一つ一つの意味が理解できた。園の保育を推進していきたい。園の

保育についての誇りや自信が強まった。自己向上への意欲が生じた。

### 3）成立した実効のある保育目標及び目指す子ども像

成立した御南保育園の保育目標は，次のとおりである。①表現しきれる体力・気力を育てる，②自分で考えて生活を創っていく力をつける，③他を応援する，年下の子のために仕事をする子に育てる，④「ありがとう」の気持ちを育てる，⑤自然のサイクルの実感や自然に生かされている感覚を育てる，⑥自然の中で美しさやすばらしさや不思議さに感動したり心を動かしたりする感性（センス・オブ・ワンダー）を育てる［補足説明：子どもの興味は，自然から宇宙へと広がっていくものであり，普段肉眼で見ることのできない宇宙の事象へと子どもの興味が広がっていくことに対しては，映像や写真や文を活用して対応していく。］，⑦感動したものを表現する心を育てる，⑧保護者の方々と共に子どもたちを育てたい。

保育目標から導き出される目指す子ども像は，次のとおりである。生きていく基礎としての気力・体力が備わっている。そして，自分で考えて生活を創ろうとする姿勢を持ち，その中で，自らを表現しようとする。こうしたことを豊かに実現できるエネルギーをもたらすものとして，人間は生かし合っている，自然に生かされているという実感や信頼感を持っている。また，自然のすばらしさに感動したり自然の不思議さに心を動かしたりする中で，自然から強いエネルギーをもらえる感性を持っている。

### 4）実効のある保育目標及び目指す子ども像の保育実践への具体化過程の概要

実効のある保育目標及び子ども像については，1で述べているように，二つの方向で保育実践に具体化していくための取り組みがなされている。

一つは，園の保育課程経営を実現しようとする取り組みである。前述のカリキュラム研究者から助言を得ながら，まず，実効のある保育目標と保育全体の理論的枠組みを前提にした上で，保育所保育指針のねらいも達成できる保育課程を編成した。[10] すなわち，園長の代理として副園長が，各年齢のクラスのリーダー保育士を中心に担当者を選定し，これら副園長を含む7名全員から，園独自の保育観に基づく保育課程編成をという声が上がっている。打ち合わせ及び協議の時間は，特別な事由がないかぎり，毎日（土・日は除く）午後の午睡の時間（1:00～2:30）とした。打ち合わせ・協議期間は，2009年の6月1日から30日までである。成立した保育課程は，年間指導計画に具体化され，所属保育士は，保育目標と保育実践のつながりを意識しながら，週指導計画を作成するようになっている。

今一つは，所属保育士有志が外部の協力を得ながら行った，より発展的な保育実践を開発しようとする取り組みである。これは，3以降で取り上げる。筆者らは，その関係者であり，開発過程でカンファレンスを実施し，園内で実施されてきた保育実践を批判的に検討し，次への課題を明確にした上で，新たな保育実践を開発している。その事例分析をとおして，実効のある保育目標を前提にした保育実践開発が，保育目標のとらえ方と保育実践の両者の質的向上を実現できる可能性について考察する。

## 3．私立御南保育園内での保育実践開発の開始

### 1）開発する保育実践の題目と保育目標との関係

本研究で取り上げている保育実践開発事例は，「宇宙にかかわるテーマで子どもの感動と表現を生み出す」保育実践開発である。この事例では，御南保育園は，次の二つの保育目標の実現を目指している。保育目標⑥「自然の中で美しさやすばらしさや不思議さに感動したり心を動かしたりする感性（センス・オブ・ワンダー）を育てる［補足説明：子どもの興味は，自然から宇宙へと広がっていくものであり，普段肉眼で見ることのできない宇宙の事象へと子どもの興味が広がっていくことに対しては，映像や写真や文を活用して対応していく。］」，保育目標⑦「感動したものを表現する心を育てる」。保育目標⑥については，自然・宇宙の事象に対する興味・感動・驚きが広がったり強まったりする過程で，実現するととらえられている。そして，保育目標⑦については，表現内容が豊かになっていったり，表現時間（制作時間及び制作物で遊ぶ時間）が長くなっていったりする過程で，実現するととらえられている。

### 2）保育実践開発を行うクラスと収集資料

保育実践開発を行うクラスは，2008年度の御南保育園（定員120名）の5歳児（30名）クラスである。当時の担任保育士への聞き取り内容と御南保育園所属の第2執筆者の観察内容を収集資料とする。

### 3）前提にある自然・宇宙にかかわる日々の保育実践

子どもたちは，通常の晴天時には，朝8：30から園庭で過ごす。保育士は，子どもたちが心地よい朝の太陽の光や新鮮な空気や風を体一杯に受けながら，空の色や雲の形を楽しみ，周囲の自然に季節を感じつつ，さらに月や宇宙の世界へ探究心や憧れを抱いていけるように，意図的に語りかけを行っている。

4）宇宙にかかわるテーマでの保育実践開発

⑴興味の広がりと意欲の芽生え

5月31日，星出宇宙飛行士が国際宇宙ステーション（ISS）へ向けて飛び立つ。その後，朝の会でこのニュースの話題が沸騰する。そこで，担任はそれに関連した新聞の切り抜きを集めて，1枚の大きなボードにまとめ，子どもが見える場所へ掲示し，図鑑も一緒に置いた。その翌日から，何人もの子どもが新聞切り抜きを家庭から持参するようになった。この頃から，担任は，クラスの全員が想像力をふくらませながら，協力し，達成感と喜びを共有できる，宇宙を題材とした大きな造形活動をしたいという思いを持つようになった。

⑵視聴覚保育の導入

6月20日，全員で宇宙航空研究開発機構（JAXA）のホームページを視聴する。シャトルが飛行する姿や立体映像による国際宇宙ステーションはほとんどの子が初めて見る映像だったので，子どもたちの目は画面に釘づけになった。視聴後，「まずは月に行って，次に太陽，それからタイタンへいこうよ。」「月に着いたら実験室でどのくらい高くジャンプできるか調べたいな。」「ロボットアームで宇宙のゴミを集めてまわろう！」などと，宇宙での実験や生活とか，ロケットや装置についての具体的な願望・疑問とかが，友だち同士で飛び交うようになった。

⑶ロケットの共同制作開始から完成へ

6月21日，朝の会で，担任と子どもとの話し合いにより，全員が搭乗してタイタンまで行ける大きなロケットを作ることを決定する。

基礎の船体部は全員で制作した。その後，子どもたちは，6つのグループ（実験室・操縦室・ロボットアーム・燃料タンク・羽根・噴射口の各制作グループ）を作り，それぞれが自らの意志でグループを選び，グループごとに内容を紙に書き記していきながら話し合いを進めた。材料（カラーポリ袋・ボール紙・色画用紙・マジックテープ・メタリックテープ等）は，担任が事前に予測して用意したが，材料の用途はあえて指定しなかった。翌日より，子どもたちも自ら考えて必要な廃材（空き缶・牛乳パック・フィルムケース・ペットボトル・卵パック等）を家庭から持ち寄り始めた。子どもたちは，制作中の4日間，毎日5時間近く集中して活動に熱中し，宇宙での生活を友だちと一緒に表現する喜び・感動を共有した。その過程で生じた制作上の困難に対しては，保育士が助言した。例えば，操縦室のイメージが子どもたちに湧かないとき，別々に思いつく物を作って組み合わせてはどうかと助言した。そして，ついに『スーパーあじさいディスカバリーロケット』は完成した。

園外の人にロケットを見てもらう機会があり，「生命力を感じる。」「今にも飛び立ちそうだ。」という評価が聞かれた。

5）考察

御南保育園は，未知なる宇宙に憧れを抱き，感動したり驚いたりする中で，自分であるいは友だち同士で考え，話し合って表現することを目指しており，その目標は実現していると評価できる。自然・宇宙を感じて考えることの日々の積み重ね，子どもが興味を持つ関連する社会的出来事を逃さず子どもの探究心・追求心を沸き立たせる保育士のかかわり，視聴覚保育の導入，子どもの制作意欲の強まり，必要な制作材料の用意，保育士の助言，クラス集団における一体感の強まり，これらから生き生きとしたロケットが完成したと考えられる。

4．カンファレンスの実施と次の課題の明確化

7月21日，カリキュラム研究者である第1執筆者と御南保育園所属の第2執筆者と他園の保育士である第3・第5執筆者と，様々な園で50年以上保育にかかわっている先輩保育関係者との間で，この保育実践についてカンファレンスを行った。その際，その先輩保育関係者より，次のような助言をいただいた。宇宙についての保育士の狭い見方によって，子どもが特に興味をもつものが十分には見抜けていないのではないか。例えば『Newton』のような雑誌を置いておくと，2～3歳の子どもでも食い入るように見る。また，保育の対象が2歳児や3歳児であった場合，子どもから発せられる言葉やイメージはもっと大きな広がりをみせつつ，その表現活動も大人の概念に縛られないより自由で発想豊かなものになり得る可能性は高い。保育士の誘導は，偏っているのではないか。

この助言と前述の保育目標を踏まえて，カンファレンスを進め，次の課題を得た。保育目標⑥の実現については，子どもたちは，私たちが想像している以上に，宇宙に興味をもつ。私たちは，自らの狭い見方から脱して，子どもが特に何に興味をもつのかを再考しなければならない。また，私たちは，本当に，美しい宇宙を実感しているのか，そして，本当に子どもたちに夢を抱かせる宇宙を見せているのか，この部分の問い直しも行わなければならない。その上で，子どもたちが感動や驚きを得るような宇宙に関する写真・映像や情報等を見いだし，環境構成に取り入れていく必要がある。さらに，保育目標

⑦の実現については，子ども自身の豊かな表現を実現していくためには，子どもには固定観念がないので，子どもの言葉が自然に出てくるように，保育士が子どもを引っ張りすぎないように注意しつつ，それぞれの子どもの興味や見方や感じ方を大切にしていくことが重要である。つまり，要は，保育目標⑥の実現のために，保育士は，自分たちの狭い見方から脱し，子どもの興味を見抜こうとすると共に，より美しくより夢の抱ける宇宙を求めるという意識改革を行うことで，宇宙にかかわる環境をより豊かでより幅広いものに構成しようとするということ，そして，保育目標⑦の実現のために，子どもの気持ちを大切にしながら，より自然に子どもからの表現へとつなげていくということである。

## 5．次の課題を踏まえた保育実践開発と考察

### 1）科学情報誌の導入

8月下旬，科学情報誌『Newton』や『Space Guide』などを何冊か保育室に置いてみる。子どもの反応を知るために，簡単な紹介で留めた。内容的に難しいので，最初は興味を示してくれるかと不安であったが，何人かの子どもたちはすぐさま本を手にとり，個人で，あるいは友だち同士で，大きな写真や絵や文字から，惑星や衛星の名前，大きさ，位置，地球との違いについて追求を始めた。

### 2）科学センターでの見学

9月3日，倉敷科学センターへ園外保育に行く。そこで，本物のロケットエンジンを見学したりプラネタリウムを鑑賞したりした。その後，2階にある大きな太陽系のパネルを前に，地球と他の惑星の大きさや色の違いなど，天体に関する話し合いが子どもたちの間で展開された。帰園後，多くの子どもたちが図鑑や科学情報誌を見て惑星や衛星の名前や特徴を調べた。

### 3）科学に関する児童書の読み聞かせ

翌年1月から3月末，園長が，毎昼食後に，『宇宙への秘密の鍵』（著者：ルーシー＆スティーブン　ホーキング）の読み聞かせを始める。この本は小学校高学年向きの児童書であるが，子どもたちは本の内容から，地球が太陽系と呼ばれる宇宙家族の一員であることや，ブラックホールの謎，そして宇宙の果てで何が起こっているのかなど，太陽系の枠を超えて宇宙の広大さや神秘さに期待と夢を膨らませながら，物語に聞き入っていた。

### 4）子どもたちに現れた成果

2月，宇宙をテーマに詩を作成する。「土星のわっかにぶらさがれるかな？」「金星・水星・月・・・いろんな星があるね。」「ボールつきしたら空までとんでいっちゃうね。」など，その時の5歳児なりの想像力と探究心が詰まった作品が完成した。3月，若田宇宙飛行士が宇宙へ飛び立つ。この日も子どもたちは登園時から打ち上げの瞬間を心待ちにしており，打ち上げ直後には2歳児クラスから5歳児クラスまでの全員が外へ飛び出して青空を見上げ，シャトルを探した。

### 5）考察―成果と残された課題―

この保育実践開発をとおして，5歳児が大人向けの科学情報誌や科学センターでの本当の宇宙についての映像・情報に触れたいと求めており，自分の追求も始めることが確認できた。宇宙に関する児童書の例からも分かるように，大人の感覚では難しいのではないかと思われるものも，子どもたちは聞き入っていくことも確認できた。子どもたちの宇宙への興味，感動，驚きをこれまで以上に広げたり強めたりする保育実践開発は実現できたと考えられる。

以上の成果は，保育士自身が，自分たちの意識の狭さを自覚し，それを乗り越えようとして，子どもの自然な言葉を聞きつつ，子どもが特に興味を持つものを見抜こうとしたり，無限に大きく美しい宇宙に興味を抱き，見て感じて知ろうとする意欲を持ちつつ，宇宙に関する新たな写真や情報や物語を保育に取り入れたからである。こうした意識変革により，保育目標⑥「自然の中で美しさやすばらしさや不思議さに感動したり心を動かしたりする感性（センス・オブ・ワンダー）を育てる」のとらえ方を質的に向上できた。ただし，保育目標⑦「感動したものを表現する心を育てる」へとつなげていく，そのつなげ方の追求が課題として残った。こちらの言葉がけがない中で生じる，宇宙に対する子どもの心の動きに素直に応じながら，制作への意欲が強まったときに制作活動へと展開することが，望ましいと考えられた。この望ましい実践の開発が，次年度の課題になった。

## 6．次年度の園内での保育実践開発と考察

### 1）保育実践開発を行うクラスと収集資料

保育実践開発を行うクラスは，2009年度の御南保育園（定員120名）の5歳児（31名）クラスである。当時の担任への聞き取り内容と御南保育園所属の第2執筆者の観察内容を資料とする。

### 2）前提にある自然・宇宙にかかわる日々の保育実践

毎朝，子どもたちは戸外に出ると，その日の空の色や雲，空気や風，太陽や月などの天体を見たり感

じたりしながら戸外遊びを始める。「お月さまの色がこの前とちょっと違うね。」などと言いながら空を見上げ，「ロケットみたいなスピードで走り跳びしよう！」と言って，活発に活動する。また，保育室の宇宙に関する本や科学情報誌，図鑑などを見たり，新聞を持ち寄って話し合ったりと，毎日の生活や遊びの中で宇宙に関心をよせて過ごしていた。

### 3）宇宙にかかわるテーマでの保育実践開発

#### (1)宇宙探検へのきっかけ

6月12日，月周回衛星「かぐや」のミッション終了のニュースが入り，その映像を全員で宇宙航空研究開発機構のホームページで視聴する。「うわぁ，すごい。」「かぐやって月にぶつかったの？」「これが本当に月なん？」などの言葉がもれ，その神秘的で不思議な映像に釘付けになる。

6月15日，朝の会で，保育士が子どもに「宇宙ってどんなところなんだろうね？」と投げかける。「銀河がある。」「宇宙飛行士が宇宙の事を調べている。」などの意見が出，「宇宙は知らないことがいっぱいだけど，不思議で楽しそうなところみたい。みんなで宇宙探検に行こう！」と言うところまで，話は盛り上がる。続いて，保育士が「宇宙のどこにいくの？」と聞くと，「木星がいい。」「宇宙からオーロラを見たい。」などと様々な意見が出る中，「『かぐや』が行った月に行きたい。」という意見が出て，全員が賛成し，月探検が決定した。その後，午後の絵本を読む時間になると，友だち同士で図鑑を見て，「地球に火星くらいの星がぶつかって月が生まれたんだって。」「地球は月の4つ分の大きさなんよ。」などと，友だち同士で月の誕生について調べたり，話し合ったりする姿が多く見られるようになった。

6月19日～26日，各人が墨，スケッチペン，絵の具のいずれかを選択して，四つ切画用紙に自分の好きなロケットを表現し，月探検へ出発した。この時の自分の宇宙探検を描いた作品を10月末の第40回世界児童画展に出品した子どもたちがいて，作品『ロケットに乗って宇宙探検』が日本美術教育連合賞に選ばれ，表彰された。また，11月初旬の第69回全国教育美術展に出品した子どもたちもいて，特選に選ばれた子がおり，絵画表現において大きな成果を生むことになった。

#### (2)興味関心の質的高まり

6月30日，DVD『ザ・ムーン』を部分的に鑑賞する。ロケット打ち上げや燃料タンク切り離し，そして，月面着陸後の宇宙飛行士が月面で活動する姿から，子どもたちは「月の上は砂ばっかりだ！」「踊ってるみたいに歩いてるね。」「(ジャンプしたら) 遠くの岩まで跳べた！」「月の（上を走る）車が出てきた！」などと，月面世界を食い入るように見，鑑賞後には，気づいたことや感動したことを発表した。

7月1日，倉敷科学センターに見学に行く。プラネタリウムでは，竜座・琴座・天秤座・鷲座などの星座に興味を持ったり，七夕伝説の映画を視聴したりした。また，2階にある大きな太陽系図を見て，惑星・衛生の大きさや色や形や物理的性質の違い，また，地球からそれぞれの星までの距離を調べた。

7月17日，スペースシャトルエンデバーの打ち上げ成功を受け，保育士が大型本『太陽系大地図』を子どもたちに手渡す。「(水星の地表を見て) 岩ばっかりだ！」「(天王星を見て) リングが縦に回ってるよ！どうして？」「衛星って他の星みたいに丸くないんだね。どうやって回っているのかな？」など，数名ではあるが，宇宙を科学的に見ていると理解できる感想も聞かれるようになった。

7月22日，前から楽しみにしていた日食を観測する。全員で戸外に出て，太陽観測用フィルターを目に当てて空を見上げ，太陽が欠けていく様子を観察した。中には「太陽の周りに星が見える！木星かな？」「緑のオーロラみたいなのも見える！」と言う子もいたので，保育士が天文技師に電話で確認すると，「皆既日食ではないため，塵か何かが写りこんだものが星に見えたのでしょう。」という返答であった。しかし，中には「絶対に星だった。」と最後まで言い張る子もいた。

#### (3)月面車を作ろう！

9月3日，保育士が子どもに「月探検には何がいると思う？」と投げかけると，「宇宙服」「食べ物や飲み物」「寝るための基地」「月の岩とか調べるためのドリル」などがあがる。その後も話し合いは続き，「月は広いから，乗り物がいる。」と話は発展し，「それじゃあ，月面車をつくろう！」と月面車制作が決定する。早速「月はデコボコだから，タイヤはギザギザしてないと！」「水があるか調べるのに，ドリルもつけよう」「アンテナを付けて地球と話ができるようにしよう！」などと，具体的なイメージを膨らませ，設計図をホワイトボードに描き，イメージを共有した。そして，5グループ（車体・望遠鏡・操縦席・アンテナ・はしご）を作り，9月8日，それぞれが自らグループを選び，制作を開始した。

#### (4)制作から完成へ

制作は木工とした。木材は保育士が様々な種類，大きさ，厚さの木材を集めた。釘は子どもが材料に合わせて長さを変えられるように長さの違うものを3種類用意した。なお，安全面を配慮して，車輪と土台の接続及び調整は，保育士が地域の金物店に協

力を得て行った。制作が開始されると，子どもたちは，金づちと木材とのこぎりを手に取り，グループごとに作業を開始した。「ここはドリルがつくんよ。」「ハンドルはどんなのにしようか？」「アンテナはここかな？」と，友だちと協力して木を切り，釘を打ち，それらを持ち寄って組み合わせ，さらに新たなパーツを作るという工程を何度も繰り返した。１日４時間以上戸外での制作に熱中し，約１週間を費やして，ついに子どもたちの夢と希望がつまった月面車が完成した。早速，子どもたちは『ザ・ムーンあじさい号』と名付けられた月面車に乗り込み，「月の大きい穴に基地を作るぞ！」「氷のある所にいこう！」「向こうに地球がみえるよ。」と想像を広げ，本当に月面にいるつもりになって園庭いっぱいに月面車を走らせ，月探検ごっこを２カ月以上に渡って存分に楽しんだ。

９月26日，月面車は，全体のテーマを月探検とした秋の運動会のシンボルとして運動会にも登場し，会場を大いに盛り上げた。その後，月面車は子どもたちの手で必要に応じて改良や補強を加えられながら翌年の２月末までの間，クラス内での，あるいは異年齢での宇宙探検ごっこに欠かせない戸外での遊び環境となった。

(5)その他の表現活動と興味の広がり

十五夜が悪天候により観測できなかったため，10月28日の十三夜に天体望遠鏡を使った月観測を行う。子どもたちは小さなレンズを覗いて「きれい…。」「本当にデコボコしてる。」「月面車がもう一台いるなぁ。」などと，より身近に感じられるようになった月世界を友だち同士で想像しながら，感動を共有した。

１月21日から，園長による『宇宙への秘密の鍵』の読み聞かせが始まり，３月末まで子どもたちは物語の主人公ジョージになりきって，彗星に乗って宇宙探検を楽しんだ。

２月末には，子どもたちは，宇宙探検について資料１の詩を作るようになった。

資料１　2009年度あじさい組の詩「うちゅうたんけん」

すいせいにのって　うちゅうたんけんにしゅっぱつだ！
つきをいっしゅうするぞ
うちゅういっしゅうだ
みえないブラックホールに　きをつけろ！
すいこまれたら　じかんがおそくなるぞ
どせいのわっかは　ちりとこおりで　できてるよ
おおきなもくせい　まるいちきゅう
ことざに　ペガサスざ…
いっぱい　みたいな

げつめんしゃで　つきたんけん
でこぼこみちが　いーっぱいあるよ
つきのみずをみつけよう
みずをうかばせたら　どうなるとおもう？
サッカーしたら　どうなるかな？
なわとび　たけうま　いちりんしゃもしたいな
ぼうしとりしたら　ぼうしがうかぶよ
ぼくも　うかんであそびたい

うちゅうのほしは　いくつある？
どうやって　うちゅうはできたんだろう？
ほんとうに　うちゅうじんはいるのかな？
うちゅうって　ふしぎ
うちゅうは　なぞだらけ
でも　おもしろい

### 4）考察

一年間を通じて，宇宙をテーマに保育を計画し，展開した。その過程は，前年度の成果を活かし，関連する社会的出来事を逃さず子どもたちの探究心を沸き立たせつつ，子どもたちの興味に応じながら，DVDや本や太陽観測用フィルターを用意したり園外保育を間に挟んだりしたことで，子どもたちは，興味，感動，驚きを得ながら，互いに感じたことや考えたことを十分に出し合ったり，語り合ったり，宇宙についてより科学的に探求しようとしたりした。その流れの中で，宇宙にかかわる表現を自分であるいは友だち同士で行うプロセスをたどることができた。特に，描画作品の受賞と制作そのこと及び制作物を使った遊びの長期間化と宇宙に関する詩の作成は，その成果といえる。

### 7．総括的考察と今後の課題

御南保育園では，実効のある保育目標とそれを統合する形で目指す子ども像を明確化し共有し，保育実践へと適切に具体化していく取り組みを行ってきた。その過程で，宇宙にかかわるテーマでの保育実践開発が派生している。この場合，保育目標の内の次の二つを特に意識する。それは，⑥「自然の中で美しさやすばらしさや不思議さに感動したり心を動かしたりする感性（センス・オブ・ワンダー）を育てる［補足説明：子どもの興味は，自然から宇宙へと広がっていくものであり，普段肉眼で見ることのできない宇宙の事象へと子どもの興味が広がっていくことに対しては，映像や写真や文を活用して対応していく。］」と⑦「感動したものを表現する心を育てる」である。同園の考え方では，⑥を実現しようとする保育実践が，⑦を実現しようとする保育実践へつながるのは自然であるが，そのつながり方が問題になった。

保育実践についてのカンファレンスの結果，保育

目標についての考え方が次のように発展した。⑥については，自らの狭い見方から脱して，子どもが特に何に興味をもつのかを再考し，また，本当に，美しい宇宙を実感しているのか，そして，本当に子どもたちに夢を抱かせる宇宙を見せているのか，この部分の問い直しも行った上で，子どもたちが感動や驚きを得るような宇宙に関する写真・映像や情報等を見いだし，環境構成に取り入れていく。そして，⑦については，子どもには固定観念がないので，それぞれの子どもの興味や見方や感じ方を大切にしていき，子どもの自由な発想の中から表現への意欲が強まり，豊かなものに結実するように援助する。続いて，この保育目標のとらえ方の質的向上に基づき，より質の高い保育実践が開発された。すなわち，子どもの興味や感動や驚きの対象は広がったり強まったりし，表現内容もより豊かになり，制作時間及び制作物で遊ぶ時間もはるかに長いものになった。

以上から，実効のある保育目標とそれを統合する形で目指す子ども像を明確にして，共有し，その実現のためのより発展的な保育実践開発を追求する過程で，保育園における保育目標のとらえ方と保育実践の両者の質的向上は，実現可能であると考えられるのである。

ただし，この保育実践開発事例には，課題がある。すなわち，今日求められている保育課程経営を推進していく場合，保育課程の保育実践への適切な具体化，実施された保育実践の保育課程に基づく評価，評価結果を踏まえての改善策の考案，これらを適切に行うための条件整備が必要である。本研究で取り上げた保育実践開発事例の段階では，これらの条件整備についての研究成果は得られていない。例えば，実施された保育実践の保育課程に基づく評価を適切に行うためには，同じ保育目標を実現しようとする，同テーマの保育実践であっても，評価項目は，各クラスのそれぞれの時期ごとに設定する必要があり，評価の根拠となる資料についても，保育現場で日常的に収集可能な資料の中から見いだす必要があろう。少なくとも，こうした条件整備を行った上で，保育目標のとらえ方と保育実践の両者を質的に向上させる保育実践開発を検証できて初めて，前述のことは本当に保育現場で実現できたといえる。

なお，保育課程の保育実践への適切な具体化を行う段階で，例えば，子どもの主体的な生活を保障するという保育の基本が踏まえられておく必要がある。前述の課題の論述においては，主に，保育の目標・内容面の関連を重視している。このこと自体は重要である。なぜなら，保育目標というものを軽視し，保育目標と保育内容・保育実践との関連が意識されていない場合，どのような子どもに育つかは，行き当たりばったりということになりかねないからである。しかし，同時に，保育士の主に子どもへのかかわり方にかかわることといえる保育の基本は重視する必要がある。この点を重視することは，保育界では周知のことであると考えられるが，この点だけでなく，この点と保育の目標・内容面の関連とを共に実現できる条件整備も求められるといえるのである。

注

1）筆者が日常的に関係している保育所は，公的に○○保育園という名称を使っておられるので，そのことを尊重し，本研究では，保育園という名称を用いることにする。

2）厚生労働省（2008）『保育所保育指針解説書』，フレーベル館，12･124-153頁。

3）横松友義・渡邊祐三（2009）「各保育園におけるこれからの保育課程開発のための園文化創造アドバイザーの支援に関する考察」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』141，29-42頁。

4）厚生労働省（2009）『保育所における自己評価ガイドライン』厚生労働省。

5）鈴木千代子（2005）「保育目標（どんな子どもに育てたいのか）の合意に向けて～『週だより』の取り組みから～」『季刊保育問題研究』212，219-222頁。

6）横松友義（2011）「保育課程経営研究の提唱」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』146，1-6頁。

7）横松友義・渡邊祐三（2009）「各保育園におけるこれからの保育課程開発のための園文化創造アドバイザーの支援に関する考察」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』141，29-42頁。

渡邊祐三・横松友義（2010）「実効のある保育目標を保護者に説明する手順の開発―私立御南保育園でのアクション・リサーチ―」『家庭教育研究』15，45-54頁。

8）横松友義・渡邊祐三，前掲書7），参照。

9）横松友義・渡邊祐三，前掲書7），参照。

10）渡邊祐三，横松友義（2010）「実効のある保育目標と保育全体の理論的枠組みを前提にした保育課程編成手順の開発―私立御南保育園でのアクション・リサーチをとおして―」『カリキュラム研究』19，85-98頁。